

リソースとしての日本学の展望

李 徳 奉*

リソースとして日本学を眺めてみる場合、また新しい日本語教育の観点から日本学を眺めた場合のあり方について展望する。

1. 国際化時代における「異文化理解」という課題

最近、「異文化の理解」という言葉がしきりに言われている。言葉を身につけるだけで、異文化の理解はできると信じている人はだれ一人いない。また「異文化の理解」のために「日本事情」を教えることがよくある。日本国内でも海外でも日本事情を教えるところは多い。しかし、日本事情を教えても日本文化が理解できるとは限らない。

さらに、最近流行の「文化を取り入れた日本語教育」で異文化理解は達成できるだろうか。これは、ある文化事項を素材として日本語を教えるわけだから、文化の量からすると日本事情よりもはるかに減ることになり、その効果は逆に落ちる可能性がある。

このように、現在、私達は言葉の習得、日本事情の紹介、文化を取り入れた日本語教育を行っているが、これらで異文化の理解の達成は期待できない。これから異文化理解の問題を考えていく上では、自己本位の洞窟型思考よりは、体験中心や現場中心の広場型思考のほうが望ましい。それでは、異文化を理解するための日本語教育はどうあるべきなのか。

2. 日本語教育能力検定試験の出題領域と日本語教育の新しいパラダイム

2000年から日本語教育能力検定試験の問題の領域が変わり、言語と社会、言語と心理、言語と教育、言語の構造、応用言語学、およびコミュニケーション能力の6つの分野に問題の領域が広がった。すなわち、日本語教師に求められる領域が相当広くなった。これは時代のニーズが変わったことの反映である。しかしこのような目標を外国人が外国語教育において達成するということは、困難である。

その一方で最近、時代的ニーズを反映し、日本語教育の新しいパラダイムとして「総合的日本語教育」という言葉がかなり聞かれるようになった。

これは様々な意味合いを含む。一つは2000年にソウルで行われた「日本語教育国際大会」で使われていた意味で、語学、文学、日本学、日本語教育学、メディアの活用など、あらゆる日本学の全般の領域を日本語教育に取り入れる、といった領域総合の日本語教育、いわゆる領域拡大といったものである。従来用いられていた総合日本語教育というのは、4技能総合のことであった。また、最近の日本の学校教育における「総合学習」というのは体験重視の学習でもある。体験型日本語教育の場合はどうしても自律学習を重んじるようになる。これは新しいパラダイムの一つの属性である。もう一つは2004年8月の日本語教育国際シンポジウムで私がはじめて使った用語で、「ユニバーサル日本語教

* 同徳女子大学外国語学部教授

育]としての意味合いを持つ。日本語がユニバーサルなのではなくて、日本語教育がユニバーサルであり、あらゆる人のためになる日本語教育という意味である。

例えば、観光のために日本語が勉強したい人には観光のための日本語、本が読みたいくて日本語を勉強している人には本が読める日本語を教える、すなわち、それぞれのニーズ別の日本語教育が考えられる。そのほかにも、福祉用、年齢別、レベル別、母語別、職業別、教育環境別に指導方法が開発されればよいと思う。また、あらゆる教授法は短所と長所があるはずだから、学習方法や学習文化にあわせて教授法を選んで教えられるような多様な教え方も必要であると思う。

結局、これからは日本学の素養のあるネイティブ教師が求められる時代になったのは間違いない。さっきの能力検定試験からもこのようなニーズが読みとれる。いずれにせよ日本語教育における新しいパラダイムのもとでは、どうしても日本学的な情報や素養が求められる。

3. リソースと日本語教育

現在の日本語教育は国際理解のための、または国際交流のための日本語教育になってきた。現在、日本語教育は従来のそれとはニーズが変わっており、転換期を迎えていると思う。しかし、ニーズが変わっても、日本語教育に携わっている人々のコード・スイッチングは簡単にできるようなことではない。それにより、ニーズは変わっても実際にやっているのは従来とおりやっている場合がまだ多く、その意味で今の時代は転換期と言えよう。

これまで、リソースというのは、教育資源または一種の資料のレベルに過ぎなかったが、これからは教育において新しい役割を果たすであろう。というのは、いまの学習者は教師がひっ

ばることを嫌い、自分のみずからやることを非常に好むからである。

このような自律学習の場合、学生はあらゆるリソースを通じて勉強するが、そのときのリソースはすでにリソースではなくなる。リソースはもはや教材そのものであり、また教師そのものとなる。すなわち、リソースの新しい役割というのは、教師、または教材としての役割である。また、リソースというのは情報化時代のなかで一人歩きすることになる。すなわち、これからリソースは勝手に歩き回り、学習者は自由自在にリソースを活用するようになる。

ところで、国立国語研究所の調査からすると、タイと韓国のリソースの量はそれほど少なくはないが、質は必ずしも十分とは言えない。この質が今日の日本学が直面している大きな問題であると思う。

リソースは、もの（文献、CD）、ひと（専門家）、こと（行事）、ところ（体験場所）、メディアの5つの類型に大きく分けることができる。この中で、ものは世界中に溢れているが、ひと、こと、ところは不足していて、これが現在の日本学のリソースの問題である。どこの国にもビジネスや留学で来ている日本人は多いが、その日本人と現地の人々の付き合い・触れ合いはほとんどない。

リソースとしてもう一つ取り上げられるのは情報である。日本に関する情報はいっぱいあるが、本当に価値のある情報はあまりにも少なすぎる。つまりリソースの類型から考えると、日本学関連のリソースは極めて乏しいと言えよう。

4. リソースとしての日本学

日本学の領域としては、日本言語学、日本文学、日本史学、日本民俗学、哲学・思想・宗教学、日本芸術学、日本教育学、社会・政治・経済学などがある。学問としては人文・社会系の

すべてが日本学の中に入るので、これを専攻できるようなコースは無理である。韓国日本学会には8つの学会（日本語学会、日本文学会、日語教育学会、日本教育学会、日本歴史・文化学会、日本社会・民俗学会、日本政・経学会、日本語翻訳・通訳学会）がある。

また、日本言語学の下位分野として、日本語学、比較日本語学、対照日本語学、応用日本語学、社会日本語学、心理日本語学、教育日本語学、翻訳日本語学、介護日本語学、臨床日本語学、コーパス日本語学などが考えられる。今後このような分野の発展を期待したい。日本語学のリソースとしては、語彙・文型・用例コーパス（談話）、対照言語学的研究、語用論的研究、方言学習の資料、応用言語学的資料、外国語学習者のための辞書、発音クリニック用ソフト、習得の研究（文字習得、発音習得、語彙習得）、言語行動文化資料、などを提供してほしい。

日本文学のリソースとしては、時代・ジャンル・領域を超えた研究や、情報化された電子ブック（自動翻訳、翻訳文、解説・資料・電子辞書、朗読、参考資料、動画像資料などの機能つき）、小説のレベル別の分類、研究方法論の開発、応用学的研究資料、などが考えられる。

日本学のリソースとして用いるには、対照日本学、国際的共同研究や日本学の情報化が行われ、日本学を人類学、国際学、学際学、また多民族学として研究することや、日本学のテキストや日本学教育のカリキュラムを研究することも大事である。

5. 異文化リテラシー—異文化理解の原理—

異文化リテラシーを身につけるための私なりの原理をいくつかあげておきたい。

①文化の属性理解の原理。文化というのはどういう属性を持っているのか、文化そのものに対する理解なしでは異文化も自文化も理解するこ

とはできない。

②リスペクトの原理。人間関係も同じであるが、異文化に対する尊敬の念を持っていないと理解にはつながらない。

③相互理解の原理。やっぱり理解というのは相互理解にならないといけない。

④グローバル・スタンダードの原理。地球人なら通じるようなグローバル・スタンダード、それが無理ならグローバル・スタンダードが必要である。例えば、アジア地域のスタンダードがあれば、それを教えることでその地域ではすべて通用できるようになる。

⑤アイデンティティ保持の原理。これから国際化やグローバル化していく上で、自分のアイデンティティをいかに保持するのか、衝突をいかに解決していくべきか、などの問題が重要になる。

⑥異文化ゲームの原理。異文化に適応しきれない段階ではゲームのつもりで異文化を楽しむことも効果的である。

⑦交流・交友の原理（共有・共感の原理）。人間というのは自分が体験したことを大事にする傾向がある。交流や交友の体験は教育的な効果がかかり期待できる。

⑧自文化の中の多文化理解の原理。自文化の中の異文化との妥協や付き合いから体験していけば、本当の異文化との付き合いも難しくはない。ヨーロッパやアメリカはこういう環境に置かれているところが多く、異文化との付き合いがそれほど難しくない。日韓中の人たちは、単一的な文化が強調される中で、周囲に異文化があるにもかかわらず、気づかずにいる。そのため外との付き合いが下手になる。したがって、外の文化を理解させるためにまず自文化の中の多文化を見つけることが効果的である。

6. リソース・リテラシー

先ほど指摘した通り、確かにものとしてのリソースは多い。しかし、学習者も教師もほとんどリソースを活用していない。すなわち、日本語に関するリソースはあるが、それをどう利用すればいいのかがわからず、利用されていない

のが現状である。したがって、これからはリソースを活用するリテラシーを教える必要がある。この意味でリソースはもはや「教材」であり、「教授法」である。そして自律学習を広めていくためには、リソースの活用能力をも教えていくべきであろう。

《講演会報告 4》

* 第4回講演会の要旨については本年報の次号に掲載する。

題目：「中欧における日本研究の現状と課題」

講師：ダヴィッド・ラブス氏（チェコ カレル大学哲学部）

日時：2005年1月25日（火）

《共催講演会記録》

* 比較日本学研究センター・留学生センター・比較歴史学コース共催「国際交流セミナー」

題目：「韓流（ハンリュウ）の背景をさぐる」

講師：李 志炯（イ・ジヒョン）氏（淑明女子大学）

権 赫基（コン・ヒョッキ）氏（同上）

日時：2004年12月15日（水）

→詳細は「お茶の水女子大学留学生センター年報」参照。